

みんなの吉



柳沢 良幸さん
(広島)

環境保護運動がめざすものとして生態系の保全、生物の多様性という概念があります。しかしながら生態系の保全というようなことになると事が甚大かつデリケートな話になり一個人で関われる筋のものではないように感じることが多いです。実際聞いてみたことはないのですが、佐渡のトキや豊岡市のコウノトリを野性に返すまでの費用は、億単位のはずですからとても個人でできるものではないと思います。

ところが、習慣で行ってきた生活を少し変えるだけで、全然違った結果が表れるというところをこの頃身近で体験したので紹介してみたいと思います。

私は幼少より身体にアレルギーをもち苦しんでいました。15年程前食へ物にも関係があることを知って、自分で何とかしないと誰も助けてはくれないという考えにいたり、自分で稲を作ることになりました。それまで両親が除草剤と化学肥料3個ほどまいて苗を植え、泥虫の白い葉をまいていた稲作を変え、有機肥料をまき、ある人から教わりフナ、コイを除草のため放流しました。

最初は気づかなかつたのですが、次の年、ある7月の朝、田圃に行くとい何百という羽化したトンボの抜け殻が、稲の葉についておりびっくらしました。それから意識をして田圃の中をのぞくようになりました。水中のミジンコ、オタマジャクシ、タガメのような水生小動物から、水上の無数のクモ、アキアカネ、オニヤンマから小魚を捕食していくカワセミの親子、来てもらっては困るアオサギまで正に一つの生態系が存在していることに気がつき驚きました。

今年特にうれしかったのは、カフトエビが発生し、田植え後しばらく何億年も生きていた彼らのユーモラスな行動を観察できたことです。私にとって田圃が最も身近で生態系をのぞける場所であり、生き物に会いに行くのが楽しみの場所でもあります。

この頃犬や猫のようなペットを飼う方が増え、霊園公園の周りをうれしそうに散歩をしているのを見たりすると、人は本質的に他の生き物と関わって行くことを求めていると感ずることがあります。私にとってはそれが、オニヤンマや蛭やカワセミなのであります。



町の宝、それは青少年です。厳しい環境の中で青少年の健全育成が地域の一歩大切な課題だと思っております。基礎的能力を身につけるのは小学校教育では三年生までが非常に大切な期間であります。四・五年生になるとそれまでの成果が一度に花開きます。

助走していた段階から子どもたちは競うことの楽しさの中で自然に知識が身につきます。学力が身につけば自信もついてきますし、すべてに前向きに取り組む姿勢が子どもたちに目立ち始めます。体育のレベルまで向上し、非行もない、生活態度もしっかりし自分の役割を身につけることができます。

学校・家庭・地域、それぞれの立場で健全育成を目指したいものです。

(笹沢 武)